LC
りぽーと
Vol. 39

〒663-8558　西宮市池開町6-46
武庫川女子大学言語文化研究所
TEL　0798(45)3536
FAX　0798(45)3574
http://www.mukogawa-u.ac.jp~ILC

「誤用か変化か？　ことわざ・慣用句」

「感動して鳥肌が立ちました」。テレビのバラエティー番組などで、出演者がよくこのようなコメントをしています。さて、あなたは、このコメントを聞いて、「鳥肌が立つとは、本来、恐ろしいことに使うものだ。間違っている」とチェックを入れるでしょうか。それとも、「確かに鳥肌が立つほど感動した」と納得するでしょうか。

「ことばは変化する」とよく言われますが、ことわざや慣用句も例外ではありません。それらが表す意味や使われる場面が、本来のものから変わってきている例はあります。それは、誤用なのでしょうか。それとも、今、まさに変化の途中にあると考えるべきなのでしょうか。

当研究所では、ことばに関心をもつLC倶楽部会員を中心に、ことわざ７項目と慣用句11項目についてアンケート調査をしました。その集計結果から、新しい意味・用法が生まれてきている、あるいは、定着しつつあると認められることわざ２項目、慣用句４項目をレポートします。

◆調査概要

調査方法	アンケート用紙を用いた郵送調査		
調査時期	平成26年５月、６月		
調査対象	LC倶楽部会員①	138人	有効回答数　64人（46.4％）
	阪南大学学生	24人	有効回答数　24人（100％）
（年代の内訳）	10・20代（31人。10代は18歳、19歳の大学生）		
	30代（３人）、40代（５人）、50代（７人）		
	60代（23人）、70代以上（19人）		

◆データについて

・30代、40代、50代の回答人数が少なかったため、ここでは、10・20代、60代、70代以上の結果について示す。

・〔適切・迷う〕や〔不適切・迷う〕など、質問に対して複数の回答があったデータは省く。

---

① LC倶楽部は、ことばに関心がある人の集まりである。したがって、ここでの結果が、広く一般の結果と同じ傾向を示すとは一概に言えない。

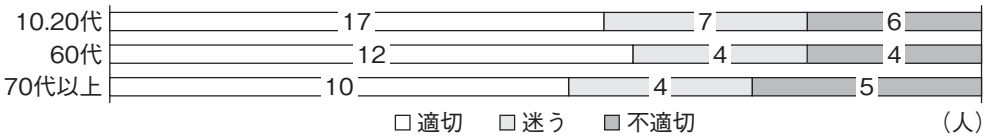
1．ことわざ

1．1「蛙の子は蛙」

本来の意味：子は小さいころは親に似ていなくても、結局は親の進んだ道をたどるものだというたとえ。特に、凡人の子は凡人にしかなれないなどの意に使う。

> 先生のお嬢さんも、この春から、高校の先生をなさることになったんですね。
> おめでとうございます。やっぱり、**蛙の子は蛙**なんですね。

図1



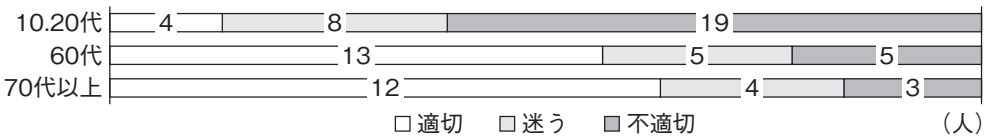
「蛙の子は蛙」は、しょせん蛙は蛙、平凡で取るに足りないという意味合いがあり、本来は自分や自分の身内にのみ使うものとされていた。だが、結果を見るように、どの年代も「適切」と回答した人が半数以上の結果であり、他人に対して使ってもかまわないと考える人が多い。蛙のイメージが弱くなり、単に、子が親と同じ道に進んだり、同じ職業を選んだりすることを表すことわざとして認識されつつあると言える。

1．2「犬も歩けば棒に当たる」

本来の意味：物事を積極的に行う者はそれだけ災難に遭うことも多い。

> **犬も歩けば棒に当たる**と言う通り、あちらこちらに出かけていれば、そのうち、
> 何かいいことがあるはずですよ。

図2



ウロウロ外を出歩くと、災難に遭うのか、それとも、何かいいことがあるのか、「災難説」と「幸運説」、正反対の解釈があるとされるが、本来の意味は「災難説」である。60代より上の年代で「幸運説」が多い結果となった。

これら二つのことわざは、近ごろ見聞きする機会が少なくなったと考えられるものだ。特に若い世代では、日常で使用する場面がそれほどないと推測される。だが、「犬も歩けば棒に当たる」の10代、20代は「幸運説」を不適切だと回答している人が多い。これが、ことわざを理解した上での回答かどうかは、詳しく調べる必要があるだろう。

2．慣用句

慣用句の使い方として問題があるとされている用例を示し、どう考えるかを尋ねた結果を示す。

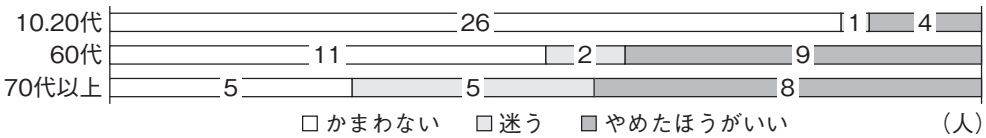
2．1「鳥肌が立つ」

〔本来の用法〕怖さを感じたり、嫌いなものを見たり恐ろしいものに出合ったりしたときのゾーッとする不快感を表す場合。

〔最近の用法〕感激した時や興奮した時の気分を表す場合。

> ミュージカルの舞台を初めてみて、その素晴らしさに、**鳥肌が立つ**ほど感動しました。

図 3



70代以上では「やめたほうがいい」がやや多いが、「かまわない」や「迷う」の回答もある。10代、20代では、大半が「かまわない」であり、この用法が一般的になるのは、それほど遠くない将来だと言えそうだ。

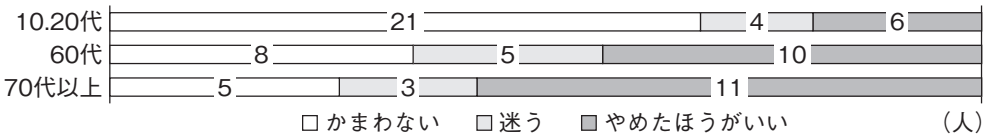
2．2「檄を飛ばす」

〔本来の用法〕人々を急いで呼び集める。自分の考えなどを広く人々に知らせて同意を求める。

〔最近の用法〕がんばるよう、強い調子で励ます。

> ボクシングの試合中、倒れそうになっている選手に向かって、トレーナーが**檄を飛ばして**いる。

図 4



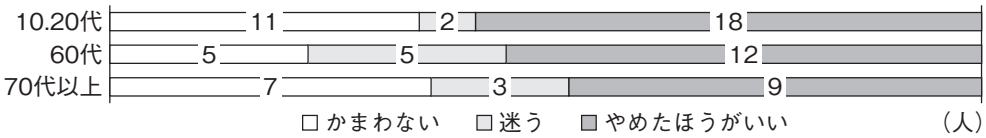
これも、10代、20代では、「激励」の意味で使うことを「かまわない」としている人が多い。「檄」は古代中国で、召集または説諭のために書かれた文書を意味する。だが、「檄」は日常的にそれほど使うことばではない。また、「激励」の「ゲキ」と音が同じため、「はげます」と混同している可能性がある。

2．3「汚名挽回」

「名誉挽回」、「汚名返上」とされていたものが、コンタミネーションにより「汚名挽回」が生まれたと考えられている。ただし、『三省堂国語辞典』第７版（2014年１月）に「誤用ではない」と明記された。「汚名を着た状態をもとどおりにすること。汚名を取りもどすことではない」というのがその理由だという。

> 前回の試合は、自分のエラーが原因で負けてしまいましたが、次の試合では、勝利に貢献できるよう活躍して、**汚名挽回**したいと思います。

図５



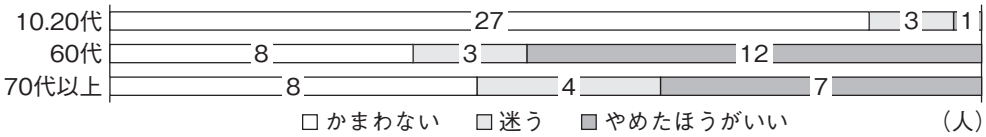
若年層も老年層も、「やめたほうがいい」と考えている人の方がやや多い。

2．4「的を得る」

「的を射る」、「当を得る」とされていたものが、コンタミネーションにより「的を得る」が生まれたと考えられている。これも『三省堂国語辞典』（同）で、「的を得る」も立項されることになった。

> 彼女の意見は、いつも物事の本質をついていて、**的を得て**いる。

図６



10代・20代では、ほとんどが「かまわない」としている。おそらく「的を射る」が本来の用法だと気づいていない可能性もある。

「汚名挽回」と「的を得る」が国語辞典で認められたということは、今後、使用が増えることが予測される。

〔参考資料〕北村孝一編・監修（2012）『故事俗信ことわざ大辞典』第二版，小学館
見坊豪記他編（2014）『三省堂国語辞典』第七版，三省堂

末尾になりましたが、アンケートにご協力くださったLC倶楽部会員の皆さん、阪南大学学生の皆さんに感謝申し上げます。

担当：佐竹 秀雄・岸本 千秋　作業協力者：金田 梨加　2014年12月